

《アルシオネ》

— 不完全な悲劇 —

小 林 卓

序

《アルシオネ》は、デュ・リエ作の悲劇であり、1637年の春から夏にかける頃初演されたとおもわれる。《ル・シッド》初演の数ヶ月後である。デュ・リエの悲劇としては、前年に発表された《リュクレーヌ》に継ぐ二作目であった。1628年にデビュー以来多く悲喜劇を手がけてきたデュ・リエがこの時期に悲劇に進出したことは、遅ればせながらも30年代における悲劇再興の波に参じたことをものがたる。40年代に入ってから、サユル(1640)、セヴォル(1644)という注目すべき悲劇を書き、今日、『デュ・リエは、古典悲劇の歴史の中で重要な位置を占める⁽¹⁾』と評されるほどである。

題材は、アリオストの名高い叙事詩《Orlando furioso》の34歌に録された一挿話である。地獄で責苦を受ける亡霊が、前世でおかした罪業を語るという形態で、次のような物語りがみられる。

この亡霊は、前世においては有力な国王の娘であり、まれな美貌と高慢できこえたりディアと称した。彼女の噂をききつけて、トラキアより騎士アルセスト(デュ・リエはアルシオネと改名)がやって来た。アルセストは並々ならぬ武勲をたて、官廷中の誰よりもめざましい人物となり、この英雄は最高度の恩賞によって報われるべきようにみえる。アルセストは、リディアに求婚する。しかし、より金になる縁組みを願う国王によってしりぞけられる。アルセストは、このため、国王の宿敵であるアルメニア王へ寝返り、国王を攻撃した。国王は、遂に山間の出城に追いつめられる。国王は、リディアを与えること、アルセストが手にした土地は放棄するという屈辱的な条件をつけて和平を請うことにした。

ところで、和平の使者としてアルセストの許へおもむいたリディアが見たのは、征服者の姿ではなく、彼女の前で青くなり震える恋するアルセストであった。アルセストに及ばず力の絶対さを確かめたリディアは、恋するアルセストの弱みにつけこんで、アルセストの無条件降伏をかちとったのである。

国王に帰順したアルセストは、前にもまして国王とリディアのために尽力する。残酷なりディアは、

アルセストの死を願って最も危険な戦闘にアルセストをつかわす。だが、アルセストは困難をのりこえ奉公に励んだ。突然、リディアはアルセストが彼女の前に姿をあらわすことを禁ずる。アルセストは絶望し、憔悴したあげく死ぬ。

アリオストにおける挿話をデュ・リエはほぼ忠実に踏襲している。主たる相違点は、外国からリディアへやって来たアルシオネをリディア生まれの忠臣としたこと、アルシオネは再度の求婚をしたが拒絶されたことである。この再度の求婚、拒絶、自殺が劇の総体をなす。

《アルシオネ》という悲劇は、その単純さと葛藤がもつぱら心理的であるという二点の特質によってきわめて《古典主義的》であると諸家によって評価されている。或る文学史家の評を引用しよう。『ロマネスクな素材をデュ・リエは極端なまでに縮小し、感情の対立に照明を集約させる。外面的な唯一の出来事は主人公の自殺であり、五幕の終りにおかれ、劇の全体を通じて用意される。従って、規則は造作なく守られる。かような成功作を見ようとすればラシーヌの《ベレニス》を待たねばならない。⁽²⁾』ランカスターも、『フランスの劇作家は、これまでこれほど完璧に規則に則した作品を書かなかった。これほど僅かな素材を巧みに五幕の作品に展開させるのを見るには、ラシーヌの《ベレニス》の出現を待たねばならない。⁽³⁾』と述べている。実際、必要な場合は、王宮内の二部屋にすぎず経過する時は数時間に足らず、出来事はアルシオネの自殺のみである。極度の集中と単純化がなされ、しかも成功していることは目ざましいものがある。

だが、このような外見はきわめて古典主義的な組立てにもかかわらず、本劇を古典主義悲劇と言うのはためらわれるのである。《古典主義的》というよりは《バロック的》であり、更に悲劇として十分に達成されなかったからである。

1. 背景

アリオストの原作は、忠実な愛人の求愛を無下にしりぞけることがどんなに危険なことであるかを例解するものであったが、デュ・リエの《アルシオネ》には、政治という要素が大きく混入されたために、相貌が一変したことはランカスターも指摘するところである。

本悲劇にみられる政治的要素には、二つの局面がある。一つは、宮廷という政治的場が舞台とされている点に由来する。陰微な駆け引き、打算の交錯、陰謀といった政治算術であり、他は、王政という支配形態に由来するイデオロギー的な諸問題である。

武勲の誉高い英雄から国王に謀反をくだたてた重罪人へと変わり、とうとう政治的な失脚者とはてたアルシオネのめまぐるしい境遇の転変は、常に宮廷政治の風向きの変位と対応する。本劇が開始した時点——内乱が終わり国王が復帰した——において、アルシオネのおかれた政治的立

場は微妙きわまりなかった。逆徒であり国王に敵対した人物として負の極にあるものの、王に敵対できる人物であることと王女の求婚者であることとは、彼に隠然たる勢力を付与する。叛乱の罪を問われて処断される可能性と、王女への求婚が認められることによって宮廷における実力者となる可能性の双方を考えねばならず、宮廷人がアルシオネを処する態度は意味不明なものであった。ところが、アルシオネの求婚を拒絶するらしいという王の意向が明らかにされると、宮廷はアルシオネを離れ、彼は孤立し政治的敗北は決定的となる。

更に、アルシオネの求婚に対処する王のやりくちは宮廷政治家の老練と狡猾をみごとに発揮している。アルシオネのリディへの求婚を真向から拒むことは、漸く回復した王政を再び危険におとしかねない。言うまでもなく、アルシオネの申し出を受け入れることは論外である。王は、拒絶が生みだすかもしれない政治的リスクを避けながら、アルシオネの求婚をこぼまねばならない。このために、王はアルシオネの求婚をどのようにするか決定権をリディにあずけた。

「たとえ、そちの恋する心が姫を願おうとも、そちをこぼむ心をどうして得られようか。」

631-2

「姫に会うがよい。さあ、姫の気持を確かめるのじゃ。わしは、姫が満足するようでよい」

639-40

一方、リディの側は心中深くアルシオネを恋しており、王女という地位はその感情をあらわにすることを許さず、認められないことでもあるが、国王の命令というなにものにも優先する強制力が、余儀なくも彼女をアルシオネに結びあわすことをひそかに期しているのである。それぞれの思惑が、アルシオネの申し出を処理する責任を免がれ相手に転嫁しようとするので、王と王女のやりとりは、さながら言葉の戦いとなる。

— なんと、なにを申すのだ。どうしようとするのだ。

— 陛下のおぼしめしにかない、服従の徴しるしを明らかにし、御意に従おうとするのです。

— 余の御意にしたがうとな！ いまわしい恋になびくことが。

— 陛下の御命令とあれば、忍んでなびくことでしょう。

— そちが即くべき王位を軽んずるのか。

— 主君の御命令ならば、軽んじもしましょう。

— わしが、このわしが、かような見苦しいまねを見のがすとも思っているのか。

— 陛下がよろしければ、私もそう致します。陛下、私を試そうとなさいますか。どのようなことであれ、不平を言わずに従がう覚悟でおりますことは、御存知のはずですのに。

— いやいや、家来は王座にふさわしくない。 795-806

結局は、不体面で許されないことだが王の強制というかくれみのを好便として実現しようとするリディの思惑を、王の老獪さが出し抜く。

「なるほど、わしは罰あたりな不届なものが褒美をせがむのをゆるした。だが、それだけのことにすぎない。そちが、わしの許に反抗するのを見たかったのだ。」807-10

「わしは、そちの身の振り方について完全な自由を与えよう。服従する必要はない。しぶしぶながら服従されるのを見るよりも、気高くも逆らうのを見たいものだ。そちのつとめを果たすのだ。そちは主^{あるじ}なのではないか。あれは家来であり、そちは女王なのだ。」

819-24

このような経過から、アルシオネの申し出をこばむという重大な決定はなされた。表面的にはリディが自己の義務が命ずる選択をしたことになるが、その実、はなはだ策略的な産物であった。アルシオネの姫への求婚を王の側が受け容れなかったのは、「身分違い」の結婚はあり得ないとする血の論理である。これは君主政の根底をなす世襲性及び王のカリスマ的權威の基盤となる論理であり、王にとってないがしろにできない君主政の基本的前提であった。だが、二度目の求婚を、約束を交わしたにもかかわらず、拒否せねばならなかったのには、より一層現実的、政治的な理由があった。その事情はリディのセリフに明白に表わされている。

「裏切ったものが、忠義によっては得られなかったのに、謀反をおこしたために手に入れるとは。謀反人が陛下の恩賞によってむくわれるのでしたら、謀反ほどよいものはありませんまい。気違い沙汰に褒美が出るのでしたら、たくさんのおこしまなものが謀反にはしるでしょう。」377-80

アルシオネは、一度王にこばまれた望みを達するために内乱を起こし武力によって目的を貫徹しようとした。遂には、リディを与えるという約束を王からもぎとることに成功した。彼の要求がいられるならば、こうした非道なやり方が是認されること、自分の願いを王に認めさせるには謀反を犯し王を武力で追いつめればよいということが天下に示されることになる。それは、血の論理を破ることよりもはるかに深く根本において、王の支配への挑戦であり、王政の否認に他ならない。王は、王政を守り維持するためには、アルシオネの法外な行為に正当な罰を加えねばならないのであって、それを黙認することすら危険である。ましてや、アルシオネの要求をうけ入れるなどあり得ないことである。

王の側からみれば、アルシオネが惹起した問題は、王よりも強大であることが実地に証明された臣下を王政を傷つけることなく、いかに巧みに処置するかという困難で微妙な政治課題であっ

た。アルシオネの要求をまともに拒否するのも受け入れるのも、王政を破滅におとしかねないのであった。アルシオネ自身が自らの要求が容れられるはずのないことを悟り、自らの行為の罪を認め、自殺という自罰を加えるという本劇の進行をみるならば、王政にとっては、まことに理想的な結着がつけられたと言える。アルシオネの要求を入れるという約束を好餌に王政を窮地から救い出し、再びアルシオネが求婚すると返答の責任を王女にかぶせることによって決断のリスクを避け、遂にアルシオネを自殺に追いこむことによって王政を無傷のまま存続せしめた王の巧妙なしのぎ方は、prudence politiqueのお手本であった。本劇は、君主に政治を教える教科書であると言われるのもつともである。

武力の威圧に屈したためといえ、王が一度アルシオネの要求をのみ、リディを与えると約束したことは事実である。アルシオネは王の「聖なる約束」557を信用したために兵をひき投降した。そこで、約束を履行する義務と政治目的が矛盾するとき、王はどこまで道徳的義務に拘束されるものかという問題が生ずる。これも、王政がたびたび直面する厄介な問題であった。

アルシオネが、王の約束に期待することのできないものがあるかと問うたのに対し、次のような返答がされた。

「王は、それを免がれ得る。法にもしぼられないように。確かに、王は君に王女を約した。だが、どうしてだ。なぜこのような約束をしたのか。君のために恐怖のどん底に投げいれられて、約束したのは王であったか、それともやむにやまれぬ事情であったか。外国人が領土に侵入し、王子達は殺され、おのれの威光、国家が地に墜ちたのを目にしたのだ。その苦しみといえば、君がひきおこしたのではないか。落ちゆく運を再興するために、君の情熱をみとめ、王女を君に与える約束をしたのだった。」215-226

このセリフを語る人物は、必らずしも王や王政の擁護者ではなく、アルシオネの親身な友であり、本劇中においてアルシオネがもった、ただ一人の味方という役柄であることをおもえば、この問題がどのように答えられたかは明白であろう。「国家の安寧のために」575、576という優先する政治目的を達成するためには、道徳的顧慮にとられる必要はないという命題は、誰一人として—アルシオネ自身からも—異議なく承認されるのである。

以上にみられるように、イデオロギー上の諸問題、扱われ方、解決の方向は、本劇のイデオロギー上の基盤を明らかに示す。それは絶対主義的王政のイデオロギーであり、モーランも指摘するように、⁽⁴⁾《アルシオネ》はリシュリユエの政治的ラインに沿った作品であった。この悲劇が初演された1637年という時点においては、リシュリユエの政策の雄弁なプロパガンダであったとすることができる。

《アルシオネ》に大きく導入された政治的要素が、本劇のイデオロギー性を示すのは如上の通りであるが、エステティックな面からも大きな影響を及ぼした。アリオストにおいては、架空の世界に展開する恋愛譚というロマンスの色彩濃い物語が、政治という苛酷な現実的背景の中に設定されることによって、よりシリアスになり、悲劇的な相克をもつことが可能となったからである。アルシオネとリディの愛は単なる感情の遊びではなくなり、さまざまなしがらみのある現実的世界に身をおく男女が、自己の生存や生き方を賭けての恋愛となった。悲劇的世界の背景として「政治」という場を設定したことは、エステティックな面からは高く評価される。

2. 性 格

リディは王女として、アルシオネの罪深い行為を容認することはできなかった。彼女はくもりのない洞察眼をもってアルシオネが犯した罪の大きさと性質を観察したが、一方では、彼女は心の奥底でアルシオネを恋してもいた。王女として王政の堅持を至上の要請として自ら認めるリディは、アルシオネへの恋に苦しまねばならないことになる。

「わたしは恋している。測り知れぬ運命の導きで、いとしい人にそむくことになった。あの方が墓に眠るのをみる。私もそこに眠る。」689-92

「でも、なぜあの方を愛してはいけないのかしら。あの方が私の心を燃えさせたせないなんて。王ではなくとも、王となれるお方。愛しよう。恋の鎖のとりこになろう。」703-8

「よこしまな卑劣なおもい。あの謀反人こそ、最も^{きよ}聖い所に罪深い手をかけたのではありませんか。野蛮な人^{あしげ}を愛するとは。王を足蹴にした邪悪な家来。憎しみをもやそう。あまりの迷いといえば迷い。愛は罪、憎しみは徳」709-18

恋と、それと矛盾する政治的、社会的、道徳的要請との対立に悩む王女という役は、この時代の悲劇に頻出する型であり、リディもそのような一人に数えられる。ところで、先に引用したリディと国王のやりとりをみると、言葉の表面にうかぶ論理の裏に、国王の命令という神聖な強制力の助けをかりてアルシオネとの恥ずべき結婚の成就をもくろんだと解釈することは決してうがちすぎではなからう。少くとも、リディは自分のジレンマを解決するために、恋を断念するというヒロイックな決断を自主的に、自らの意志によって選択しようとしなかった。彼女は恋に圧倒されるという心の弱さをこのようにして示したのである。換言すれば、リディは感情を第一義とするロマネスクな性格を多分に受けついでいると言わねばならない。

アルシオネは嚇々たる武勲に輝き国王に大きな貢献をもたらした武将として基本的に性格づけられている。ところで、このように宮廷で重きをなす武人が、自分の恋をうけいれなかったとい

う理由だけで、謀反にはしったということは、あまりにも軽率にすぎ信じがたいことである。これは、アルシオネが自己の政治生命を失なう危険をおかすことになるばかりでなく、社会的、政治的混乱をひきおこし莫大な損失をリディアにこうむらせることを意味するからである。リディア全土を戦乱にまきこみ、外国の軍隊に蹂躪させ、多数の生命を失なわせたことは、国王に謀反するという罪の重さを別にしても、重罪であると言える。ところが、アルシオネはこのような事情をいっさい考慮にいれないのである。

また、アルシオネのリディアへの求婚は、リディアが王位継承者であるという事実をふまえるならば、単なる感情の問題で片づくものではなく、すぐれて政治的な問題とならざるを得ない。わらく勘ぐるならば、——一時はリディア自身も疑ったことが——、宮廷における勢力を確立しようとする野心がアルシオネの恋心に火をつけたと言うこともできる。アルシオネはそのような邪推を否定し、彼の愛が純粋なことを訴えるし、事実、本劇の進行は彼の主張の正しさを裏づける結果となる。それにしても、リディア、アルシオネの二人がおかれた地位と責任は、彼等の恋愛をただ恋愛にのみとどめおくものではなかったのである。だが、アルシオネにこのような配慮は、まったくみられなかった。

アルシオネは、彼がおかれた地位に必然にまといつく責任、義務、配慮をいっさい斟酌せずに、彼の恋愛感情に盲従した。更に、恋愛が障碍にであろうと、彼の行為がひきおこす政治的、社会的混乱を無視して内乱をおこすという暴挙にでた。あまりにも短兵急であり、枢要な地位にある武人の行動としては非現実的な信じがたいことである。

アルシオネは窮地に追いつめられた国王が背に腹をかえられずに、リディアを与える約束をしたことを信用して、謀反を収め、再び王に帰順した。ここに、アルシオネのあまりの政治的未経験があらわれていよう。王の約束とはどのようなものか彼は洞察する知恵をもたなかった。彼が実際にリディアを手に入れることができたとすれば、圧倒的な武力を手にして国王を追いつめているときしかなかったであろう。彼の友人は言っている。

「君の恋心がかの王女を得るのを見ようとすれば、約束されるとすぐに手に入れるべきだったろう。（略）武器を手にして彼女と結婚すべきだったろう。」229-32

王の口約束を信頼して帰順し、同盟した軍と手を切ったのは、あまりのおめでたさ、政治的未熟であり、宮廷で重きをなす武将のすることとは考えられないことである。

国王に多大な貢献をした重要な地位を占める武将が、自分の行為を政治的、社会的、倫理的尺度から規制しようとせず、いちずに感情のおもむくままにまかせ、国家に莫大な損失をこうむらせるとともに、自己の政治生命を無にし、その上、国王の口約束に手玉にとられたのである。こ

れは、はなはだしい性格の矛盾、一貫性の欠如である。

この矛盾をとく鍵は、アルシオネをロマネスクな英雄と考えることにある。愛が唯一の至上価値であるとされている世界、そして、愛の成就がさまざまな障碍にぶつかるとはいえ、決して深刻な危機や分裂をひきおこすことはなく、公認されている世界——これをロマンスの世界と呼ぶことができよう——の住人としてアルシオネを把握するならば、彼の性格と行動は合理的に説明される。それは、アリオストの原作におけるアルシオネのキャラクターであり、デュ・リエはそれを継承したのである。アルシオネの基本的性格をロマネスクな英雄ととらえることによって、彼の行動は一貫性をもち理解可能となるものの、逆に悲劇の主人公としてのステイタスに不足することになる。この点に関しては、次章に詳説する。

リディ、アルシオネという主要なキャラクターがロマネスクであることは、アリオストの原作における面影がいろいろ濃く反映していると言えるが、一方、デュ・リエに悲劇的なキャラクターとして造形しようとする意欲が欠けていたとも考えられる。《アルシオネ》が悲劇として十分に達成しなかった原因の一つはキャラクターライゼーションの不足にあった。

3. 悲劇性

アルシオネは、王の再度の拒否によって政治的立場を失ない、恋の成就を阻止されたのであるが、彼を最も苦しめたのは政治的地位の失墜ではなく、恋の破綻であった。

「私の苦しみのもと、私自身のうちにある。私そのものが苦しみなのだ。私を苦境から救おうとするなら、私自身から脱がれるすべを教えねばならない。」1177-80

アルシオネの苦しみは、リディへ懐いた恋心を断ち切ることによって解消される。だが、友人が示唆したこのような「健全な考え」1173は、アルシオネになにももったえることはなかった。政治的、社会的、人間的な配慮を放棄して愛という情念の命令に従ったアルシオネが、友の一片の忠告によってめざめることなど不可能である。盲目の情念の導きにいっさいをゆだねた以上、アルシオネは行きつくところまで行くしかないのである。ひき返す途は、はじめから閉ざされている。盲目の情念がアルシオネを駆りたてた先は、彼の言う「不幸」であった。そして、アルシオネは、自分の「不幸」の原因をたずねたあげく、運命が、星のめぐり合わせが悪かったのだと認める。

「私の運命にまといつく星のめぐりあわせの悪さのために、あまりに勝利を得たために私は不幸なのだ」1217-19

アルシオネの「不幸」の原因は、彼が愛の導きにいっさいをゆだねたこと、自己の地位が必然

的に招来する政治的、社会的、導徳的責任を放りだして恋愛という利己的な目的を追求したことにあった。このように考えれば、彼が「不幸」の原因を運命のせいにしたのは、まったくの見当違いと言わねばならない。

ところで、前章で明らかにされたように、アルシオネは、元来ロマンスの英雄である。愛の成就が他のすべての目的よりも優先する、愛の成就が究極には他の諸々の価値と矛盾せず調和するロマンスの世界の住人として、アルシオネは、自己の本性に従って行動したのである。もしアルシオネに、愛とは別の価値についての配慮を要求しようとするなら、彼の *characterisation* が変更されねばならないだろう。実に、彼の不幸は、ロマネスクなキャラクターが、より現実に近い深刻な悲劇の世界にまぎれ込んだことにあった。アルシオネの「不幸」は、彼自身の性格から必然的に生みだされる、彼にとっては避けることのできない結果である。従って、アルシオネが、自分の破滅を彼自身の罪に由来するものとしてではなく、運命的な不可避なわざわいとして把握したことは、決して彼のひとりよがりとはいえないのである。

「なんと、天が私をほろぼす。私の首をいかづちが打ち砕く」1335-36

アルシオネの不幸が、彼自身の力や性質によってはどうしても避けることのできない運命的な滅びである、と認めるかぎり、アルシオネに運命の悲劇性をみることができよう。次のような運命への嘆きは、もっともパテテックな度を加えて、*fatalité* の悲劇を印象づける。

「あゝ、運命の矢、幼少の頃、私を一撃のもとに葬りさっけてくれていたら。私を滅びの淵においやる運命は、なぜゆりかごを墓としなかったのだ。その頃、私には勇気も、勝利による栄光も欠けていた。恐れられることなく、偉大さをもたず、名声を知らなかった。だが、愛することも知らなかった。」1351-58

しかしながら、アルシオネにはほの見えた *fatalité* の悲劇は貫徹されることなく崩壊する。彼は、最後に及んで自分の迷蒙からめざめ自己の罪を明らかにして、自らに裁きをつけるからである。

「私は、国家が受けた損害をつぐなおう。あなたがたの不幸を招いたいまわしい張本人は、私なのであった。国家のために、火であり厄病神であった。」1010-12

ところで、アルシオネがこのようにロマネスクな迷蒙から唐突に覚醒したことは、これまでの彼の行動からして納得しがたいことである。愛の故に、他のいっさいの配慮を捨て猪突猛進したアルシオネが、最後に及んで突然理性的になり、自己の罪を認めるというのは性格の一貫性に欠けると言うべきである。何が、アルシオネに罪の自覚を強いたかを考えてみると、その理由を彼の心理の発展に求めることはむずかしい。アルシオネは、愛に盲従したがために、反社会的存在

となり、彼の言う「不幸」を招いたのであるが、愛を他のなにものにもまして優先するということは、彼のキャラクタライゼーションの根本規定であり、その限りで彼の「不幸」、彼の破壊は、運命的であった。運命的などすることもできない滅びに身をおいたアルシオネに、彼の行為を罪であると自認し、自己を裁きにつけようとする認識の新しい光がさしこむ可能性は、どこにもないはずである。

実にアルシオネの覚醒を喚起したのは、この作品の根底をなす、そして、作者の思想というべき絶対主義イデオロギーなのである。愛に絶対の価値をおいたために反社会的存在となり、滅びに運命づけられたアルシオネ、別の見方をするならば、愛という非社会的非合理的な情念を貫徹しようとして、絶対主義イデオロギーに鋭く対立した異端児、ないし、反逆児アルシオネを、デュ・リエは絶対主義イデオロギーの一人として、再び絶対主義の傘下に収束させないではいられなかったのである。それが、アルシオネのキャラクターにとっては場違いな罪の告白を強いたのである。

エステティックな観点からすれば、これは二重の過失であった。一つは、キャラクターの首尾一貫性をこわしたこと。他は、前述した如く、アルシオネにはほの見えた *tragique de la fatalité* をも破壊したことである。絶対主義イデオロギーに帰順し、王政の秩序の僕と化したアルシオネにおいて、彼の「不幸」はもはや運命的なわざわいと言うことはできないのであって、むしろ彼が犯した「罪」よりきたる当然の罰となったからである。

次に、アルシオネにみられ得るもう一つの悲劇性について検討しよう。アルシオネは、自己を断罪したが、それにもかかわらず、この重罪人、王への謀反人はまったくの汚辱のうちに沈んだわけではなかった。

彼は、常に本劇の主人公として、魅力的で *sympathique* な面目を失なわないのである。その理由として、軍事的勲功により国王に多大な貢献を果たした英雄としての過去、謀反という最大級の犯罪も、王位への野心によってではなくリディへの愛という情熱に由来するものであったという事情があげられる。それに加えて、アルシオネを「英雄」として決定づけたのは、彼の自殺であった。

アルシオネが払った自己犠牲は、二重の意味で彼を犯罪人という汚名から救いだす。リディアの王政にとって最大の脅威であり秩序攪乱の源であったアルシオネが自らを抹殺することによって、リディアの、ひいては王政の秩序回復を万全としたことである。彼はネガティブな方法でリディアと王権に安全と平和をもたらすという恵みを与えたのであった。次に、彼の自殺は、彼のリディへの愛が決して利害に誘導されたものではなかったこと、アルシオネの愛の純粋さを明々白々と証したことである。この結果、アルシオネが選んだ自害は、彼の名誉回復に役立ち、自害

という不幸の極みは彼の尊厳を立て直す機縁となった。

「私が死するのは、今や私の最大の勝利なのだ。怖ろしい死におもむく。ただし、栄光とともに」 1567-68

モレルは、1630年代の悲劇において出現した。伝統的な悲劇にみられない特徴として、主人公の死、あるいは破滅が逆説的にも自己肯定の機会となることを指摘しているが、この図式は、⁽⁵⁾アルシオネにもあてはまる。彼が犯した罪への罰であり自己処罰であった死が、高貴なる自己犠牲と変じ、アルシオネの栄光となったからである。

従って、アルシオネの「栄光の死」は、彼を英雄悲劇の主人公とすることを可能とすることにみえる。彼が払った高貴な自己犠牲は、彼を罪人という汚名から雪^{そそ}いだばかりでなく、英雄的な高みに昇らせるに足るものであった。国王すらもアルシオネの死に涙を流した(1564)という事実は、アルシオネの英雄への列聖を公式に確認したようにおもえる。しかし、fatalitéの悲劇が不成立に終わったように、英雄悲劇も胚種のままに達成されずにしまうのである。

剣で自害をはかったアルシオネは深傷を負いつつも、王女のそばへ運ばれ恋人同士の最後の対面という見せ場がくまれる。

「なんたることか、姫、私の流れおちる血が、あなたの眼に涙を浮かばせようとは。あゝ、あなたが私のために、今、涙を流されようとは、なんとしあわせなうれしい死だろう。」
1619-22

リディは、涙がアルシオネのために流れることを否定しようとする。

「あゝ、いつわりであなたを欺いたわたくしの涙なぞ、どうして信用なさいます。私の嘆きがまことでありましょうか。あなたの御不幸をやわらげるには、他の助けをお探しく下さい。声で裏切るものは涙でも裏切りましょう。」 1635-38

リディがこのように王女として態度をとりつくるおうとしても、アルシオネの「幸福」はいささかも減じなかった。

「姫があざむいたとおっしゃるのなら、あざむいたのでしょう。もう一度、あざむいてください。そのあざむきが、私を食いつくそうとする火を鎮めるのです。私の恋する心を醒まさないでください。だまされて死ぬのが、幸福な死なのですから。」 1639-42

ここに明確に表出された愛という心地よい慰藉を得て幸福な死を迎えたアルシオネのなかに、英雄悲劇の主人公の姿を見ることができであろうか。確かに、アルシオネの死は栄光の死ではあったが、その栄光は、モレルの表現を借用するなら『人間の限界においての超人間的、あるいは非人間的な超出 ⁽⁶⁾dépassement』を完遂したが故にもたらされたヒロイックな栄光とは別の

ものであった。コルネイユ的な感性の英雄的揚棄とはまったく反対に、アルシオネは愛へのセンチメンタルな惑溺に没する。彼が死においてとりもどした栄光は、絶対主義という公式のイデオロギーへの屈服とセンチメンタリズムに由来する色あせた栄光にすぎなかった。

リディはアルシオネのように情熱の奔流にもあそばれずに、王女という地位に課せられた役割と責任を知悉しており、それをまっとうしようとする。それ故に、「名誉と愛の葛藤」という悲劇的ジレンマにである。彼女がこの悲劇的葛藤に真正面から立ち向かおうとせず、スポイルしたことによって、悲劇的ヒロインとしての純度をいちじるしくそこなったことは前述した。しかしながら、彼女が自らの愛という感情を犠牲にするというヒロイックな決断をとったことは否定できない。

「悩んではいけない。何もいわずに、光栄にすべてをゆだね、私の安息を捨てるのです。」

825-26

光栄に愛を犠牲にするというヒロイックな決断は、リディがこのような決断に達した経緯からみれば擬似英雄的と称すべきであろうが、それにしてもヒロイックな影を帯びていた。だが、ここにかいまみられたヒロイズムは、死に頻したアルシオネが示した疑いようなない愛のあかしを目にして、もろくも崩壊する。

「あの方は野心家なのだと思っていました。私の王座がほしいのだと信じていました。でも、あの血がそうではなかったことを証拠だてます。あの方の死は、輝やく愛を明らかにしました。野心に動かされた人があのような死をむかえるでしょうか。」1673-78

このセリフが、リディの魂が愛と義務という二つの相反する価値の二律背反のうちに裂かれたのではないことを明白に示している。彼女は、アルシオネの愛への疑念のうちに、義務を選んだのであって、ロドリグとシメーナがした愛の義務への悲痛な犠牲を知らなかった。リディのみかけの英雄的決断は、このことによってますます内実を失ない、もはやヒロイックと称することもできないほどである。

リディが、アルシオネの愛を疑いようなないものとして認めたとき、既に愛する相手はこの世を去らねばならない運命にあったという点に、彼女の悲劇が存したと言えるかもしれない。愛を知ったとき、愛する相手は存在しないものとなっていたということは、パティティックを感動を喚起せずにはおかないが、それはリディ自身も認めるように、愛に不忠であった彼女が招いた当然の帰結であり、悲劇性とは無縁なものである。

「あなたがお亡くなりになってからあなたを愛するのは、私の受ける当然の罰です。」

1685-86

リディはヒロイックとして徹底していなかったと同様、ロマネスクなキャラクターとしても不徹底であった。彼女は、愛に疑念を抱き、愛を政治に従属させて、愛の至上の権利をないがしろにしたからである。アルシオネがロマネスクなキャラクターとして一貫し、徹底して愛に生きようとした限りで、不十分ながらも（なぜなら最後まで遂行されなかったから）、トラジックな様相を呈したのにくらべて、リディのキャラクタライゼーションは不徹底で力がなく、アルシオネのような輝きで魅力をもち得なかった。

アルシオネとリディという二人の主要人物に即して悲劇性を検討したが、みられるようにどの悲劇性も貫徹されずに中途半端に流失してしまった。とりわけ、大団円におけるアルシオネとリディの間になされたロマネスクな和解は、本劇の悲劇的センスを決定的にそこなったのである。二人の愛を成就できないものとした二人をとりまく状況の非情な敵対性は影を薄くし、この世で実ることのなかった愛への嘆きというセンチメンタリズムが前面におしだされた。二人が諸々のいきさつから愛を犠牲にせねばならなかった——そこには必ずしもトラジックとは言えないものもあった——悲痛さは、二人が感情の和合を確認しあい甘美な感情の慰藉のうちに身を浸し、一種の満足を得ることによって消失してしまったのである。本劇の最後を飾る自己憐憫に満ちた愛と運命への嘆きのデュエットは、パテテックに劇の終末をつけたが、およそ真の悲劇性とは程遠いものであった。《アルシオネ》は、本来の意味での「悲劇」というよりロマネスクな劇であり、挫折した悲劇であった。

結 語

《アルシオネ》という悲劇の基本的性格がトラジックではなくロマネスクであったことをどのように理解すべきかであろうか。アリオストに採られた題材が本来ロマネスクなものであったことが直接影響したことはまちがいない。しかしながら、このようなロマネスクな題材を選んだことは、デュ・リエという作家の精神がロマネスクに共鳴するものであったと考えるべきであろう。実際、デュ・リエはデビュー以来、悲喜劇を多作してきており、フランスの悲喜劇の歴史に重要な足跡を残した作家であった。

悲劇というジャンルにまでロマネスクな性格をもちこんだという、根強いロマネスクへの志向に、今日バロックと総称されている文学精神の反映をみることもできよう。ともかく、《アルシオネ》は、その極度なまでの古典主義的な体裁にもかかわらず、古典主義悲劇を形成した精神とは異質の精神の産物であった。

<註>

<<アルシオネ>>のテキストは次に依る。

Alcionée ou le combat de l'amour et de l'honneur Antoine de
Sommaville 1640

- 1) cf R. Morçay et P. Sage, *le Préclassicisme del Duca* P. 277
- 2) *ibid* P. 273
- 3) cf. Lancaster, *French dramatic literature in the seventeenth century*
Part II. vol. 1. P. 200
- 4) cf. J. Maurens, *La tragédie sans tragique* Colin P. 249 sqq.
- 5) cf. Morel, *La tragédie* Colin P. 34 - 35
- 6) cf *ibid*